# 6年　国語科

# 単元名「やまなし」

## 本単元における自ら学びに向かう児童の姿

表現や特徴的な作品の構造を捉え、作品について自分の考えをまとめることができる子

## 研究主題に迫る手だて

### （１）自ら学びに向かうための工夫

○副教材や並行読書の活用

・単元が始まる前から教室に宮沢賢治作品を置くことで、宮沢賢治作品に触れる機会を増やしておく。
また、副教材「イーハトーヴの夢」を読むことで宮沢賢治の生き方、考え方をとらえ「やまなし」の読みに生かしていく。

○見通しをもって学習に取り組むことができる工夫

・初読後の感想を交流し、児童の「問い」から学習計画を立てる。その学習計画表に毎時間、振り返りを書くことができるようにし、自分の学びを自覚し、次の学習への意欲を高められるようにする。

○言葉への正確な理解を促す工夫

・本文に出てくる新出単語の写真や絵を複数用意して提示していく。辞書引きで解決できるものは、適宜辞書を引き、調べることができるようにしていく。また、「五月」と「十二月」の読み取りには絵や図を活用し、情景をイメージしやすくする。

○個々の児童に応じた読みへの工夫

・考えの根拠となる叙述を見付けることができない児童に対しては、教師による細かな発問から対話を重ねることで叙述を見付けることのできる場を用意する。

### （２）対話的に学ぶための工夫

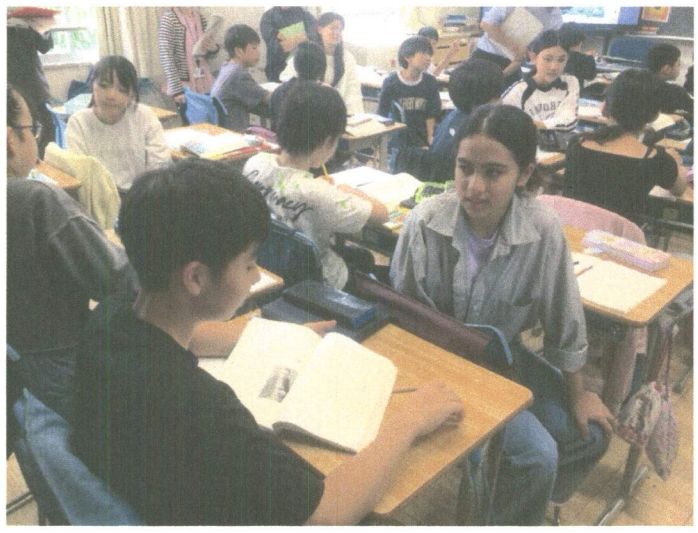
○学習形態の流動性

・「個→グループ→全体」の流れにとらわれず、「全体→個、グループ」など必要に応じた学習形態を適宜とることができるようにする。

○ゆさぶり発問を適宜入れる

・児童の話し合いだけでは、考えが焦点化されていかないことも考えられる。その際はゆさぶりの発問をし、全体交流の場で、個やペア、小グループに戻して考えるようにさせる。

単元名：「やまなし」
授業者：熊本温子　　2025年10月16日



協議会の視点

視点①個々の児童に応じた読みへの手だては効果的であったか。
視点②「宮沢賢治はどんな思いをもって『やまなし』という題名をつけたのだろうか」という学習課題は、児童にとって友達と考えを伝え合いたいと思う学習課題であったか。

指導の成果

視点①
- 読みの苦手な児童を取り出し、教師が読みのポイントを伝えることで読みの理解が深まった。
- グループで話し合ってから自分の意見を考えることで、全員が題名をつけた理由を書くことができた。

視点②
- 資料「イーハトーブの夢」を読むことにより、どんな思いをもって題名をつけたかと結びつけて考えることができていた。

指導の課題と改善案

視点①
- 前時までの板書写真を児童が見られるところ（手元やロイロ）に載せておくことで読みが苦手な児童の手助けになるのではないか。

視点②
- どんな思いをもって題名をつけたかわからない児童にとっては、グループで伝え合う時間をもう少し設定すると良いのではないか。